

但馬の偉大な二人の登山家を訪ねて

泉州労山 大西清見

<日程> (マイカーにて) 11月23日(金) 曇り時々小雨

7:10 大阪ー(阪神高速、中国自動車道、北近畿豊岡自動車道)ー日高神鍋高原ICー植村直己冒険館(豊岡市日高町)ー加藤文太郎記念図書館(新温泉町浜坂)ー竹田城(朝来市竹田)ー20:30 頃帰阪
<参加者>大西清見、榎本京子、杉村玲子、森朋子、吉村由美子

当初の予定(氷ノ山&浜坂・加藤文太郎記念図書館)を雨天予報のため中止、その代替として加藤文太郎記念図書館に植村直己冒険館、竹田城を企画しました。題して「但馬の偉大な二人の登山家を訪ねて」、参加者からも「何と素敵なタイトル…」と出発前から好評でした。コースは反時計回りで植村直己冒険館(豊岡市日高町)～加藤文太郎記念図書館(新温泉町浜坂)～竹田城(朝来市竹田)と巡回しました。あしあとも参加者5名でこのコース別に分担して書いてみることにしました。心をこめた感動の一コマ一コマをどうぞ。(大西)

1 植村直己冒険館 森朋子

勤労感謝の日、兵庫県豊岡市日高町に在る「植村直己冒険館」を訪ねました。

私が、登山家・冒険家である植村直己(生誕1941ー失踪1984: アラスカ州マッキンリー山中)を知ったのは、1986年に公開された映画「植村直己物語」でした。(当時10代だったことが判明!) 映像の影響は大きく冒険館を訪ねるまでは、植村直己=主演の西田敏行、妻の公子=賠償千恵子というイメージでした。

冒険館では、植村の経歴やお人柄、冒険スタイルやグッズ、失踪直前におけるセスナ機との無線交信では最後の肉声が流れていました。また、明治大学の捜索隊が5200m雪洞付近で35点もの装備を発見した際の写真パネルや当時の新聞記事等が展示されてありました。謙虚で大胆な植村の生き方が伝わる冒険館でした。



植村直己冒険館、北極点犬ゾリ単独行で
使用したソリと装備品



北極圏で撮影した植村直己氏のパネルの前で、
決しておごることのない笑顔がいい

最後に。平成6年に開館された冒険館は、周辺の山並みを背景に取り込んだ約200mに及ぶ直線の建築物（に見える）。一瞬「どこが入り口？」と戸惑いました。これは、大地を切り裂く“クレバス”を表現し、入館すればそのクレバスが通路となっていました。そして展示室は、“イグルー”（雪洞）をモチーフに建築されているとのこと。訪れた時はあいにくの雨天でしたが、透明ガラスが光を取り入れ、植村の遺品や功績に光をあてていました。みなさんも、一度訪ねてみて下さい。

2 加藤文太郎記念図書館 榎本京子

山陰特有の雨と晴れが交互に来る天気の中、以前から行きたいと思っていた加藤文太郎記念図書館へ誘っていただき行ってきました。山登りを始めた頃に、単独行の本を読んで憧れの人でした。

展示物は図書館の一角にあり、少なかったですが、山に関する本が沢山あり、借りる事が出来るので近くにあったら通いたい所です。建物も山をイメージした素敵な雰囲気でした。企画や、運転していただきありがとうございました。楽しい旅でした。

3 竹田城跡 杉村玲子

以前から行ってみたいかった竹田城跡。11月はちょうど雲海の時期なので、早朝であればすごい混雑だったと思われそうですが、夕方からなのでゆっくり見学できました。城跡からは、周囲が一望出来て雲海があれば噂通り幻想的な風景になるだろうと思いました。来年は、立雲峡から雲海の中に浮かぶ竹田城跡を見に来ようと、皆の意見が一致しました。



加藤文太郎記念図書館、愛用のスキーマ
展示されていました



但馬の旅のフィナーレは人気の竹田城へ、
これも登り30分のミニ登山でした

4 二人の但馬の登山家 吉村由美子

写真でみる植村直己さんは愛嬌のある笑顔、加藤文太郎さんは気難しく決して明るいとは言えない雰囲気。記念館に行くとその裏にあるそれぞれの大事な夢を実現させる強い意志がまざまざと伝わってきました。愛用の靴やピッケルからも息遣いが聞こえそうなくらい、見ていてドキドキしました。二人が手帳に日記や計画を書いたものには見入ってしまいました。計画内容や注意事項など小さな手帳に端的に記録されています。植村さんの字はくせのあるものでしたが、行く前にハガキを用意して旅先から家

族や友人に宛ててこまめに便りを書いておられました。加藤さんの字はわかりやすく、鉛筆でイラスト風に山の稜線をしっかりした線で描いていたのがとても綺麗でした。偉大な二人の故郷はとても美しく静かな自然あふれるところでした。二人の決しておごることのない真摯な態度や我慢強さ、暖かい心に通じるものを感じました。

5 植村直己冒険館で人気No.1の本・『青春を山に賭けて』 大西清見

植村直己冒険館の書籍販売コーナーに冒険館で人気No.1の本として、『青春を山に賭けて』（植村直己、文藝春秋）の文庫本が紹介されていました。この本は20年以上も前に読んだのですが、また購入して今読み返してみました。この本の解説には「五大陸の最高峰を踏んだ登山家としてその名を世界に知らしめた植村直己。戦後日本が生んだ最大の探検家の若き日々の記録。家の手伝いからは逃げ、学校ではイタズラばかりしていた少年は、大学へ進んで、美しい山々と出会った。大学時代、ドングリとあだ名されていた著者は、百ドルだけを手に日本を脱出し、さまざまな苦難のすえ、夢の五大陸最高峰登頂を達成する。アマゾンの60日間イカダ下りもふくむ、そのケタはずれな世界放浪記の全貌（西本正明）」と書かれています。偉大な登山家・冒険家なのに決しておごることのない植村直己氏、この本のあとがきに「私は五大陸の最高峰に登ったけれど、高い山に登ったからすごいとか、厳しい岩壁を登攀したからえらい、という考え方にはなれない。山登りを優劣でみてはいけないと思う。要は、どんな小さなハイキング的な山であっても、登る人自身が登り終えた後も深く心に残る登山がほんとうだと思う」という言葉を記しています。素晴らしい植村直己氏の言葉ですね。この機会にもっともっと植村直己氏を知りたいと思ったのでした。

